

京極読書新聞 <第84号>

発行日 平成28年11月1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

はじめて歩く街の楽しみ！

後志文学散歩2016

「支笏湖・洞爺湖めぐるバスの旅」

平成28年10月8日(土)



「バスの旅」も今年で8年目。今年度の読書会でとりあげている「京極文芸」創刊号の針山和美氏作品が『支笏湖』だったこと。読書会の流れの中で、畔柳二美（くろやなぎ・ふみ）『山の子供』というすばらしい作品に出会えたこと。そんなことが重なって、今年のコースは支笏湖方面に決まりました。せっかく苫小牧の街まで行くのだから、帰り道では登別の知里幸恵・銀のしずく記念館にも行ってみたい！高速道路を使うのなら、有珠山サービスエリアの宮沢賢治碑も見てみたい！といろいろな旅のアイデアが出てきます。

町から1時間半で、東西南北、日本海側にも太平洋側にも出られる京極町の特性を活かして10月8日(土)午前9時、バスは湧学館を出発。天気予報では、雨は夜になってからということだったので…（湧学館／新谷保人）



支笏湖ユースホステル（田上義也設計）にて

1. 支笏湖ユースホステル

建築家・田上義也の設計。しかし、昨年の小樽で見てまわった田上作品とは少し趣きが異なっています。遊び心が満載というか。田上と言われてみないと気がつかないけれど、言われたら、そうだよ、田上義也以外にこんなユニークな建築つくれる人はいないよとなるから現金なものです。



支笏湖はさまざまな作家にインスピレーションをあたえる存在らしく、今回のガイド冊子『支笏文集』でも、吉村昭にはじまり、畔柳二美、針山和美、筒井康隆、桐野夏生と意外なラインナップができあがりました。

中でも、筒井康隆の登場にはびっくりの声。東京が舞台のコメディタッチ『家族八景』で始まる「七瀬三部作」。『エディプスの恋人』を経て最終巻の『七瀬ふたたび』で、超能力者・七瀬たちの凄絶な最後の舞台が支笏湖畔だったことには暗い感動がありました。



2. 王子製紙 第一発電所

畔柳二美『山の子供』、第一部の舞台は支笏湖の王子製紙第一発電所です。第二部で一家はニセコ（当時は狩太村）の水力発電所に移ってくるのですが、作家・畔柳二美の人格をつくりあげた幼少記の「発電所宅」の世界が克明に描かれている点ですばらしい作品です。ある意味、『姉妹』よりも重要な作品かもしれない。

3. 苫小牧市・宮沢賢治プレート

JR苫小牧駅前から海の方に向かって歩いて行くと、歩道のところどころにプレートが埋め込まれています。何？と思ってよくよくみると、宮沢賢治の詩「牛」だったりするのですね。



大正13年（1924年）5月、岩手県花巻農学校の教師だった宮沢賢治は修学旅行生を引率して苫小牧を訪れています。正確に言うと、5月20日小樽に着いた賢治たち一行は高等商業学校（現在の小樽商大）を見学。午後から汽車に乗り札幌へ。植物園や中島公園を見て、この日は札幌泊。翌21日は北海道帝国大学や植民館を見学した後車上の人となり、夕方苫小牧の旅館・富士館に着きます。

この夜、小樽～札幌の主要任務が無事終わった解放感からなのか、賢治は一人でうらうらと前浜（現在のふるさと海岸）まで歩いて行きます。月夜に浮かぶ製紙工場の煙突や牧場の牛たちの姿を心象スケッチ（詩ノート）に詠みこみました。後年、それらが詩『牛』や『海鳴り』となって残されたのです。

4. 本郷新「緑の環」

苫小牧市を象徴するもうひとつのモニュメントが本郷新の彫刻作品「緑の環」。市内、市役所と駅前に各一体。苫小牧市に隣接する千歳市、むかわ町、白老町の境界付近に各一体。計5体の「緑の環」が見せ方のバリエーションを変えて苫小牧の街を護っています。駅前の「緑の環」をバックにして記念写真を撮りました。

今回の「バスの旅」のシンボル・マークに使ったのが同じく本郷新の「叡知の誕生」です。昼食をとったぴらっとみなと市場から1キロくらい離れた南三号公園に据えられています。



5. イザベラ・バードの日本紀行

バードが旅の目的地、蝦夷（北海道）の平取に辿り着いたのが明治11年（1878年）の8月23日。今から約140年前の北海道の光景を克明に書き残してくれたからこそ、私たちの旅の今があります。『日本紀行』の中でも白眉とされるシーンがふたつ。ひとつは二年前の「胆振国虻田をめぐるバスの旅」で訪ねた「礼文華」。そしてもうひとつが今回の「白老」です。

樽前山の美しさに見惚れたバードは突如樽前登山を決行します。嫌がる通訳の伊藤を振り置いて、馬に乗ったアイヌのガイドとともに噴火口近くまで接近。白老岳を迂回し、現在のホロホロ峠の森林を降りてくるというとんでもない冒険をやっています。現在でこそ道道86号線（白老大滝線）が通り開けた土地になっていますが、140年前の白老に86号線があるわけがない。バードたちは鬱蒼と茂る樹海の中を木の蔓草に擦り切れて顔や手を血だらけにし、あるいは蔓の輪に首をひっかけ縛り首になったり、馬の後ろ足の間に落ちたりを繰り返しながら白老の町に戻ってくるのですが、それでも平然と「おもしろかった」と書くイザベラ・バードという人はまさに凄い一言です。

この「白老」体験で根性が坐ったのでしょうか。室蘭に着いたバードは、通常の旅人がやる室蘭一森間の船の使用を一蹴し、噴火湾沿いに歩いて行くルートを選ぶのです。その最難関「礼文華」通過まで、あと一週間。



6. 知里幸恵 銀のしずく記念館



横山むつみさん 記念館にて

旅の終わりで悲しい知らせが。銀のしずく記念館の館長だった横山むつみさん（知里幸恵の姪にあたる方）が亡くなられました。9月21日夜、がんのため死去。享年68歳。

一カ月前にコースを下見をした際、横山むつみさんが入院されたという話を館の人から聞かされ心配していました。でも、今年7月に発行された記念館の機関誌「シロカニペ」第12号にも巻頭文を書かれていたりしたので、少し油断していたのかもしれませんが。文章にも、大好きな春の山菜採りの話の結びに「私はいくら好きでももう無理と自覚しました」と書かれていたことなど、もっと勘が鋭ければ気づけたのにと悔やまれます。

しかし、『アイヌ神謡集』の美しさはこれからも不滅です。今年になって須知徳平さんの『北の詩と人』が四十年ぶりに復刊されたことにより、私たちは知里幸恵の若き日の日記や手紙を目にすることができるようになりました。この本は知里幸恵の天才を決定づける一冊ではないかと思えます。湧学館には復刊と同時に即蔵書として入れてあります。ぜひ手にとってみてください。



今年のバスの旅、昼間の苫小牧・南三号公園「叡知の誕生」あたりでポツポツと降りはじめた雨は、有珠山サービスエリアではざあざあ降りの雨風になってしまいました。午前中に第一発電所や宮沢賢治プレートをすませておいたのは正解。でも、七年間続いた「晴れ男」伝説についに終わる日が来たという意味では忘れがたいバスの旅となりました。



JR苫小牧駅前／本郷新「緑の環」とともに



京極読書新聞は
毎月1日発行予定です

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

